

## 私が専門看護師になった理由（わけ）

三村 直美（東京女子医科大学病院）

私が初めて CNS という言葉を耳にしたのは、学生時代の精神科の授業の中だったと記憶している。それから看護師として大学院へ進学するまでの 10 年間、病院という臨床に身を置いた。私は生涯看護職に携わってみたいと漠然と考えながらも、最初から進学を目指していたわけではなく、むしろ自分の看護職としての人生をどこでどう歩むべきか苦悩していたといってもいいだろう。

日本看護協会の資格認定として 1996 年に専門看護師、1997 年に認定看護師が誕生している。それは私が日々の看護の中で、そして将来を見いだせずに悩む時と並行して看護協会ニュースや雑誌等で紹介され活動を知ることになったのである。

毎年行われる次年度に向けての管理職との面接では、病院という臨床から看護の場を変えたいと考える一方で、いつも後ろ髪を引かれる思いがあった。そして、自分のその思いに注意を向け、自分は何が気になっているのか、自分は何がしたいのかということを見つめることにしたのである。すると私が日々の看護で悩み、関心を向けている対象はがんを患うひととその看護であったことに気づいた。

有効な治療がなく唯一の化学療法を受けるために毎月地方から入院してくる A 氏は、私の親と近い年齢でありながら毎回「入院前日は物凄く不安に襲われるけど、三村さんの顔見ると安心する」と言い、がんの進行に怯えながらも仕事をし、家族とともに日常を送っている様子を語った。小学生の娘をもつ B 氏は、外来は孤独で辛いと涙し、終末期の C 氏は息ができないと訴え、一晩中座位で過ごした。

深夜、突然咯血し、心臓マッサージを受ける父を泣きながら見つめる息子、痛みが強くなり、自分に残された時間が少ないことを感じ孤独を訴える夫を前に戸惑う妻、持続的な鎮静の開始前に家族とこれまでの感謝を伝えあい、その妻（母でもある）の最期を見守る夫と息子もいた。

私は患者や家族を前にどう声をかければよいのか、自分が聴いていることは自分の関心のためだけで患者が語りたくないことではないのではないか、本当の思いはどこにあるのか、本人、家族にとっての喪失とはどういう体験であり、どのような看護が求められているのか、そして医師との間に生じるジレンマは何かなど、がんに関わる人とその家族への看護をより深く学びたいというがん看護専門看護師への思いが強くなっていった。そして、進学を決意した決定的な理由は、母のがんへの罹患である。この出来事によって私はがん患者の家族という体験をすることになったのである。母を在宅で看取るまでの約 1 年半、そしてその後の悲嘆は、大学院での学びや資格認定を受けた今を支える最も大きな経験となったといえるだろう。

がん看護専門看護師として理論と実践を統合していくことで、自分にとっての新たながん看護がみいだせればと思う。いま私は、がんに関わる患者や家族の力を信じ、寄り添うということ、医師をはじめとした他職種との協働の意味を自分に問いながら一歩踏み出したところである。